VTuberを始めた学級委員長（清楚）がエロ♥すぎて困る

黒名ユウ
挿絵：しりー

試し読み版

2DB
二次元ドリーム文庫

プロローグ　006
第一章　目指すは一流！　夢のバーチャルアイドルへ　009
第二章　エッチな受肉で何ができる？　043
第三章　ゲーム実況で発情中！　ヘッドショットはお口の中に♥　093
第四章　ロストバージンは食レポで？　クリオネはアソコのお味!?　127
第五章　身バレ注意のラブ♥コラボ！　176
第六章　恋人宣言！　トライアングルドリーマー　226
エピローグ　雲は流れて　258
電子版限定エピソード　大江山、姫乃の道の遠ければ　263

登場人物紹介

Characters

天野侑紀（あまのゆうき）

友人と好きな VTuber について語らうことを楽しむ、ごく普通の男子学生。

羽詩館まどか（はしだて）

成績優秀、容姿端麗でクラス中から一目置かれる委員長。実はわがままだったり、エッチな事に発情してしまう一面もある。

プロローグ

「さすが天野くん！　そんなこと私、全然知りませんでした！　本当に凄いです！」
「ええっ!?」
天野侑紀は耳を疑った。スゴイ。すごい。凄い……他の意味の言葉ってないよな？
――素乞い。
いやいやいやいや！　ないから、そんな言葉！　なんだよその「マジでお願いします」みたいなの。凄い、だ。羽詩館さんはそう言ってくれたんだ、こんな自分のことを。
そう理解した瞬間、どどーんと感動の波が押し寄せた。
（もしかして俺、生まれて初めて女の子に「凄い」って言われたかも？）
それどころではない。今、自分に向かって尊敬の目を輝かせてくれている羽詩館まどかは、侑紀のクラスの学級委員長にして学園で一番の美人。頭脳明晰、容姿端麗、男子生徒の誰もが彼女にしたいと思っている理想の女子なのだ。
女の子らしいやや低めの身長。サラリとしたストレートの長い黒髪に色白で清楚な顔立ち。優しい微笑みを絶やさない柔和な雰囲気。
いつもアイロンがかかっているピシッとした制服のブレザーと真っ直ぐなナロータイは

優等生の証。非の打ちどころのない模範生の鏡のような存在。
そんな彼女が、童貞でオタクで非モテな上に、ぼっちキャラの自分に話しかけ、あろうことか「凄い」だなんて夢でも見ているのか。
実際、もうさっきから心が、身体が、フワフワと落ち着かない。地に足がつかないってやつだ。熱があるように頭がぼうっとする。心臓なんかドッキンドッキンと破裂しそうなくらい脈打ってしまってヤバイ。止まってくれないと死んじゃう。止まっても死ぬけど！
「そっ、そんなことないよ。もっと詳しい人なんていっぱいいるし……」
どうにか謙遜してみせれば、まどかは大きく首を振って大きな目をますます輝かせる。
「そんなこと関係ありません。私の知っている中では天野くんが一番。わあ、こんなお話ができる人がいたなんて嬉しいです。夢みたい！　もっと聞かせて欲しいな……そうだ」
突然、侑紀の腕がぎゅっと握られた。まどかによってだ。
（うわわっ！）
思わず身体を強張らせ、侑紀は慌てて辺りを見回した。だが、下校する生徒たちの波も一旦途切れた半端な時刻である今、ここ、校門の周囲には誰も見当たらない。
一方、まどかは人目などハナから気にも留めず侑紀だけに夢中のようだ。
「あ、あのっ！　もし良かったら……なんですけど……」
少し恥ずかしそうにうつむきながら、彼女が言う。

「これから……天野くんのお家に遊びに行ってもいいですか？　ユメカナウちゃんのことやVRライバーのこと、もっといっぱいお喋りしたいな……って」
そこであっと口ごもり、それから頬を赤らめ、心配そうな上目づかい。
「だ……駄目ですか？」
（駄目って……そんなわけ……）
マジで？　女の子が、いや、羽詩館まどかが家に？　自分の部屋に!?
ボシュー！　侑紀の脳の温度は沸点を超えた。
これで駄目とか言える男……いないだろ！

の電源を入れた。ソフトならすぐに使えるようになっている。
「羽詩館さん、これがさっき言ってた……」
「ＶＲキャラクターを自作したりできるＶＲ-ＵｎｉｔＥｎｇｉｎｅね！　あら、最新バージョン！」
「え？　ああ、うん……」
「こっちはＣｕｓｔｏｍ ＡｖａｔａｒＳｔａｇｅ？　配信サイトも沢山登録してあって凄いっ！」
　んん？　んんんんっ？
　なんかおかしくね？
　先回りをするかのように画面上から次々と関連ソフトや配信サイトを見つけ出し、横文字だらけのその名前を嬉々として口にするまどかに侑紀は首をひねった。
（来る途中に話に出ただけで憶えちゃうなんて頭いいんだなあ）
　……って、違うだろ！
　これ、知ってるだろ！　明らかに詳しいだろ！　初心者のムーヴとちゃうやん！
「あ、あの……羽詩館さん？」
　背後から控えめに声をかけた侑紀の疑いのまなざしに気づいて、まどかが凍りつく。
「あっ、しまった……」

（しまった？）
しかし、すぐに落ち着きを取り戻した彼女はペロリと舌を出した。
「でも……いっか！　ここなら邪魔も入らなくて丁度いいし。うん、決めたわ」
「決めたって何のこと？」
呑み込めていない侑紀が尋ねると、まどかはニヤリと口の端を吊り上げ、そして言った。
「ここは今日から私のスタジオよ！」
「へっ!?」
「あなたの使命は私を一流のＶＲライバーにすること！　いいわね！」
「はいいいいいい!?」
突如として性格が豹変したかのようなその態度にたまげる侑紀の前で、クルリと椅子が回転する。そこに脚を組んで胸をそびやかすまどかは、さながら君臨する絶対女王だった。
普段の超清楚な彼女のイメージとはあまりにもかけ離れたその姿勢に、侑紀はその場で固まった。そしてようやく出て来た言葉は、
「ちょまっ、なにがなんだか……」
それを聞いてやれやれと首を振るまどか。
「……クソ雑魚理解力、やめて下さいよ」
「クソ……!?」

またしても！　彼女が口にするとも思えぬ言葉に目をむく侑紀。
「単刀直入、簡潔明瞭。これ以上ないくらいシンプルに言ったつもりよ？」
「は、羽詩館さん……だよね？」
「そうよ？」
「でっ、でもっ……！」
「ああ、この性格？　ふふ、驚いた？　こっちが本当の私。清楚な学級委員長は仮の姿」
「えええええ～～～～っ!?」
びっくり仰天に対し、まどかは悪びれもせずそれがどーしたと肩をすくめる。
「私、家が厳しくて。伝統を重んじる教育方針のせいで女の子は清楚におしとやかにって躾けられちゃって……それで身についたのよね♪」
あっけに取られている侑紀を尻目に、まどかが説明を続ける。
「いったんそういうキャラになっちゃうと、変えられないでしょ？　学校でも、家でも、ずっと自分を偽って真面目な優等生を演じ続けて……フラストレーションよね。だから、VRライバーを知ったとき、これだって思ったの」
「コレダ、とは？」
間の抜けた問いを発した侑紀に対し、まどかの人差し指がハイテンションでズビシ！と突きつけられる。

「決まってるでしょ、嘘じゃない本当の自分になれるんだもの。目指すは一流！　さあ、私をユメカナウちゃんみたいな超人気VRライバーにしなさい！　キミならできる！」

何を言っているんだ、この人は……。

やっと事情がわかってきたが、だからといって「イエス、マム！」とはいかない。

（俺のことをシンデレラに出て来る魔法使いか何かだとでも⁉）

カボチャの馬車なんか出せねえっつーの！

それに、滅茶苦茶がっかりだ。

彼女が自分に近づいたのは、VRライバーになりたかったからなのか。

「う～ん……」

「ちょっと、どうしたの！　黙ってないでなんとか言いなさいよ！」

そしてこれだ。清楚とは程遠いこの気の強い性格。いや、これはこれで好きだっていう人もいるかもしれない。侑紀にだってわかる。しかし、ついさっきまでの優しくて可愛いまどかとのひとときが幸福すぎた。それだけに幻滅が激しい。

それさえなければ、喜んで手伝っただろう。しかし……

そんなことを考えて顔を曇らせる侑紀に、まどかが少し態度を軟化させる。

「ね、お願い！　私の家、厳しくて配信ができる時間も場所もないの。いっそ学校で隠れてとも思ったけれど、人に知られずにできそうな場所なんか見つからなくて……」

（そこまで……。よっぽどやりたかったんだなあＶＲライバー……）
それには少しだけ気持ちを動かされたものの、乗り気になるには程遠かった。
正直、面倒臭い。どう断ったものか。
「あのさ、羽詩館さん……」
「そうこなくっちゃ、準備は何から？」
「いや、そうじゃなくて。ＶＲライバーなんかならなくても飾らずに生きればいいんじゃないかな。最初は驚かれるかもしれないけどさ、周りもそのうち慣れるって」
「天野くん、人生相談はいいのよ。そーいうのは求めてないの！」
まどかが机を拳でドン！　と叩く。
「それに、あり得ない！　そんなことをしたら父も母も半狂乱になってしまうわ」
「それなら、このまま我慢するしか……」
「それが嫌だからＶＲライバーになりたいんでしょう！　これは私の夢なの！　あなた、ユメカナウのファンだっていうの、嘘なの？　カナウちゃんはいつも言ってるじゃない。夢はきっとかなうって！　私の夢だって、必ずかなう夢なのよ！　それなのに、天野くんがかなえてくれなきゃ誰がかなえてくれるの？」
「ううっ……」
まどかの言い分はどこまでも自己中心的に聞こえたが、これには痛いところを突かれた。

ユメカナウの言葉を引き合いに出されると弱い。

それに、VRライバーを愛する者として、また男として、そのライバーを目指す女の子を助けないというのはいかがなものか。そう考えると自分にはまどかをサポートする義務があるような気もしてくる。

「わかったよ……手伝うよ」

「本当⁉」

まどかが顔を輝かす。真の性格がわかった今でも、その屈託のない笑顔には心をグッと鷲掴みにされる。

「じゃあ早く！　配信サイトに登録しましょう！」

はしゃぐ彼女の隣にもうひとつの椅子を並べて侑紀はパソコンの画面に向かう。

配信サイトの登録画面を開くと、まどかはすでに決めてあったかのように即座に自分のVRライバー名を入力した。

――美吹巫百舌（みふみもず）

「この名前、なんか意味があるの？」

「別に。深い意味はないわ、カッコいいかなと思って」

（なんか中二病臭いなあ）

でも、なんとなくオタクっぽいセンスを感じられてちょっと嬉しくもある。あの優等生

の羽詩館さんでも中身は意外と自分たちに近いというか。
「読み方はミフミ……ムカデ？」
「モズよ！　ミフミ・モズ！　漢字力までクソ雑魚なの!?」
「おふっ！」
百足（むかで）と間違えた侑紀に腹パンを入れて、まどかが百舌を「もず」と平仮名に打ち直す。
「でも、よかった。読み間違えられる可能性に気づけて。ムカデ委員長なんて呼ばれたくないもの。そんなVRライバー悲惨すぎるわ！」
と、名前決めでは悶着があったものの、あとは順調に進んだ。
アバターは配信サイトにある簡易的なキャラクターを使うことにして、あまり突飛なことはせず、学級委員長の姿でやろうということになった。
「これ可愛い～！」
いくつかある学生服のタイプからノースリーブのセーラー服を選んでご満悦のまどかが他のアクセサリーなどをとっかえひっかえ試し始める。
（こういうとこは女の子らしいのになあ～）
夢中になっている彼女の横顔を盗み見ながら侑紀はそんなことを思った。
「で、こうやってスマホを繋げてカメラを自分に向ければ……」
「わあっ、動いた！」

パソコンの画面の中のキャラが、自分と同じように目を丸くしてキョロキョロと左右を見回すのにまどかが歓声を上げる。
「感動するよね！」
侑紀も思わず声を弾ませる。
「本当。自分がパソコンの中に入っちゃったみたい！」
まどかは興奮して目をキラキラさせていた。
「ねえねえ、手や足はどうやって動かすの？」
「それはできないんだ……顔だけしか動かせないけど、その分簡単にすぐキャラを作れるのがウリの配信サイトだからね」
「ふ～ん。動かせたらいいのに……」
また無茶な命令でもされるのかと思いきや、不服そうなのは口調だけで、まどかはそれでも満足な様子だ。VRライバーとしての第一歩を踏み出せた喜びの方が大きいと見える。
「これ、もう配信していいんだよね⁉」
「うん、最初は自己紹介からだね。でも、いきなりで大丈夫？」
「大丈夫よ！　喋る内容はもうず～っと前から考えてあるんだから！」
侑紀が差し出したインカムを奪うように受け取り、子供のように嬉々として音量調整を始めるまどかにはもう、先ほどまでの暴君の面影は残っていなかった。

（本当にＶＲライバーがやりたかったんだなあ）
清楚イメージとは程遠い裏の顔に面食らいがっかりもしたが、本当の自分になれる場所を見つけたいという彼女の夢は応援してあげたい。
……ユメカナウだってそうするだろうし。
それによく考えたら、これから彼女は配信をするために、この部屋に通うってことだ。
それってけっこうワクワクすることなんじゃないだろうか？
わだかまりがまったくなくなったわけではないが、やる気も少しは出て来た。
侑紀はまんざらでもない気分だった。
なんだかハッピーな未来が待っているような予感がする。
（そうだよ、こういうのも悪くないかもしれない！）

ひっくり返ったままのまどかが苦し気に悶える。そして、悶えはするが自分がこんなにも濡らしてしまっていることには気づかないようだ。それがまた侑紀の心に火をつける。

すりっ、すりすりっ、にゅくっ、ぷにゅっ……！

布越しに感じ取れる女の子の部分の複雑な形状。突けば突いただけ指先を受け入れ吸い込む肉の溝。放たれるストーブのような熱もまた愛液と同じで布を越えて伝わってくる。

（これが羽詩館さんの……ああっ、直接見てみたい！）

皆の憧れる清楚な学級委員長の一番恥ずかしい場所。

今を逃せばきっともう二度と目にする機会などありはしない。幸い、まどかは性器への刺激に耐えようとぎゅっと目を閉じて精神を集中している。

（パンツをゆっくりと下ろしていけば……）

小指の先を引っかけて、気づかれないようにじりじりとショーツをずらしていく。もちろん、おま○こへの攻撃もゆるめない。つんつんちゅくちゅくと、しつこくなぞり、くすぐり、弄ぶ。

「はあっ……うくうっ……」

「３Ｄモデルを正確に動かすためには反応のデータも取りたいんだよね……どう？」

「ど、どうもないわよ！　いっ、いいから、さっと済ませなさい！　んっ……んぅっ」

テキトーなことを言って挑発してやると、まどかは強がってみせるために目をいっそう

固く閉じ、歯を食いしばって声を漏らさないようますます必死になる。これでいい。
女の子のパンツを気づかれないように降ろすのは胸躍る体験だった。焦らず、慎重に、露わとなっていく臀部から太腿の裏へと連なる曲線の緩みを愉しみながら……。
（ぐうおおおっ!!）
ついにぺろりと剥けたお尻の絶景！　大きくて張りのある可愛らしい真っ白な双丘が、ぷるぷると肉を震わせて露出する。しかも！
（穴ッ、穴あああっ！）
綺麗なピンク色をしたまどかの排泄口……肛門までもが丸見えに！
それは、そこから何かが出て来るなんて考えられないような美しさと清潔さを備えていた。それでありながら、ヒクヒクと呼吸をするように大きくなったり小さくなったり蠢いているのだ。清楚でありながらいやらしい、目もくらむような光景だった。
（ああ、凄い！　こんなのを直接この目で拝めるなんて！）
ズボンの中で痛いくらいにチンコが突っ張る。
（やばっ、射精ちゃったかも）
そうでなかったとしても、先走りは確実にしているだろう。それぐらいエロかった。
「ま、まだなの……？　いつまで見てるのよ……んううう」
まどかはまだ自分の身に何が起こっているか気づいていなかった。だが、時間の問題だ。

キュートなお尻の穴に見とれてばかりもいられない。
（アソコ！　アソコ見ないと！）
またしても侑紀は当初の目的を忘れてしまっていた。だってそうでしょ？　傍若無人で気の強い女の子が、大人しくパンツを脱がされるままになっているのだ。今はただもう、そんな彼女の一番恥ずかしい箇所が見たくて見たくてたまらない。誰だってそう思う。これで終わってしまうのは嫌だ！
しかし、ここに来て失敗だったのは、まんぐり返しの姿勢をとらせてしまったことだ。お尻の穴の位置まではパンツを下げることはできたが、そこからは開脚に引っかかって降ろせない。肝心のアソコは、そうして進退窮まり伸び切った下着の布地にちょうど隠れてしまって、向かい合って立つ侑紀からは見えないのだ。
（こうなったら！）
強硬手段だ。侑紀は意を決して身を乗り出した。曝け出されたまどかのお尻を、両手でがしっと掴んで抱え込む。そして思い切り顔を突っ込んで――
「やあっ……！　な、なにしてるの⁉」
異変に目を開いたまどかがようやく気づいて叫ぶ。だがもう遅い！　侑紀の目の前には愛らしい縦に割れたお肉の筋が！　しかも、しかもっ……
「は、生えてないっ⁉　羽詩館さんはここの部分まで清楚だったんだ！」

幼女のような無毛のパイパンま○こ。色素の沈着も一切ない鮮やかなピンク色。清楚！純潔！　イノセントッ！　感動が侑紀の心を震わせる。そして、甘く匂い立つその部分に顔を埋めずにはいられない！

「ああんっ……いっ、嫌ああああっ！」

まどかの腰が跳ね上がり、侑紀の首がずぽりと挟み込まれた。

「ぐはあっ！」

めっちゃ柔らかい太腿の感触。すべすべのふわっふわだ。幸せ。しかし、魅惑の縦筋はもう見えない。

（こっ、これはあっ……）

首四の字おパンツ固め！　侑紀の頭部はむちむちの股間にがっちりとホールドされてしまった。そして、そこからの……

「このドスケベ！　調子に乗って何やってるのよ！　よくも見たわね……ゆっ、許さないんだから！」

ホールドされた状態で目を合わせると、まどかは羞恥に顔を真っ赤にして激怒していた。そして、ギシギシと制裁の締め上げを強めていく。

「これでまだ見足りないなんて言わせないわ。３Ｄモデルは絶対に作り上げてもらうから」

「ぐへええっ！　はっ、外して……苦ぢいっ！」

土下座が勢い余って地面に首だけめり込んでしまった人のように、情けない格好でジタバタともがく侑紀。まどかは容赦なく、受けた屈辱を倍返しするべく更に力を強める。
「外して欲しかったら三日間でやるのよ」
納期、縮まってるじゃないですか！
「無理だよっ！」
「寝ないでやりなさい」
（ブラック企業かよ！）
しかし、今回は負けを認めざるを得なかった。おパンツ見せてで追い出し作戦は失敗だ。スケベに流され、やりすぎた自分のせいだ。いや、まどかの粘り勝ち？　てゆーか、それどころではない。首が、首が締まる。死んじゃう！
「わがりまぢだっ……わがりまぢだがらぁっ！　お願いしますっ、脚ほどいてぇっ……！」
侑紀はまどかに素乞いした。

まどかは身を震わせてうっとりとした声を上げた。
《んっ、う……はあっ……》
次にどんなことをされるのか、期待が高まる。興奮する。
（取って……ブラを外して、私のいやらしいおっぱいを曝け出させて）
このまま乳房を露出させ、思い切り愛撫して欲しい。
しかし、まどかの願いは届かず、侑紀はまどかのお尻を焦らすように揉み込み始めた。
（う……どうして？　で、でも、それも感じる……！）
股下の温かな秘所に触れそうで触れない指先がもどかしい。欲しい、もっと。アソコがじんわりと濡れていく。
ふぁさっ……
スカートのファスナーが降ろされてロングスカートが床に落ち、ブラとお揃いのピンクのショーツが露わとなった。
突き出されたお尻の上を再び這い回る侑紀の手の平。
撫で回すそのいやらしい手つきとの距離が縮まったのは布一枚分だけ。だが、それでも気持ち良さは段違いだった。
（は、あっ……感じる。侑紀がどんどん……私のエッチな所の近くに……）
ショーツ越しのフェザータッチに性感を高められて、まどかの身体はどんどん洗濯機に

密着していった。震える背筋。そして、自分の触って欲しい所を恋人が触りやすくなるようにと、両脚が徐々に開く。
（お願い……早く）
パンツの中はもうびしょ濡れだった。まどかのつるつるのおま○こは愛液を恥毛に吸わせることができない。だから、溢れた熱蜜はすべてがだだ漏れとなってしまう。
（ああっ、恥ずかしい……でも、だから良いの。侑紀に恥ずかしい女の子だって、確かめられたい！　はあああっ……）
そして、来た。侑紀が股の間に手を当ててくれる。
にゅむにゅむと恥丘を揉みほぐし、秘密の縦筋にすうーっと指を走らせる。撫ぜられたそばからじゅわっ、じゅわっと愛液が浸み出てしまう。
《ひうっ……》
気持ち良すぎて、思わずお尻を侑紀に押し付けようとしてしまう。
（くうっ、指……もっと、強く当てたい……！）
クリトリスと指の間に挟まれたクロッチの布地がよじれてシワを作る。それがこすれて新たな快感を生み出す。
「やらしいお汁がどんどん溢れて来てるよ……」
侑紀が耳元で囁き、証拠とばかりに粘液に塗れた指先をまどかの目の前で広げてみせる。

（ああんっ、えっちぃ……凄く恥ずかしい！）
全身がカッと火照り疼く。もうじっとしていられない。まどかは艶めかしくお尻を回転させた。そのエロティックなローリング運動を捕まえて侑紀がショーツを滑らせる。
するっ、するするっ……するるっ！
降ろされていく下着は股間を剥き出しにしたあたりで伸び切って止まってしまう。
そこに、じゅぼりと侑紀が手を突っ込んで直にまどかの陰部にあてがった。
（ああんっ……それ好きぃっ、切ないぃ……！）
これから始まる淫らな愛撫を予感させる温もりに嫌でも期待が膨らみ、子宮がヒクつく。
そうやってじっくりとまどかを焦らしておいてから、しゃがみ込んだ侑紀がまどかの片足を支えて持ち上げ、ショーツを抜く。ブラと靴下を残してあとは生まれたままという、ちょっと変態っぽい姿を一番みっともない真下からの角度で観察されて燃え上がる羞恥。
まどかは悦んだ。がくがくと震える白くて形の良い両脚の内側を熱液が垂れ落ちていく。
まさに期待を超えた恥ずかしい格好だった。全身が桃色に染まる。
そして、侑紀がいよいよ本格的に行為を開始した。
くちゅ……にちゅっ……
まずは陰唇をなぞり、ぬめる膣口の浅瀬で指を遊ばせる。
《あっ……ああんっ……》

まどかは洗濯機に両手をついて必死に身体を起こし、快感に耐えた。
そのくせ、侑紀には逆らわず、それどころか卑猥な開脚をどんどん大きくし、突かれるのに合わせて腰を落とそうとすらする。それを察知したらしく、侑紀はわざと指を入れるタイミングを外して意地悪を始めた。指を引き、追いかけさせておいて、まどかがあきらめた瞬間にズブリと挿す。
《……ぅっっっっ！　あああああああん!!!》
まどかの上体がガクッと崩れた。予期せぬ突然の気持ち良さに力が抜けてしまったのだ。
（ズルイ！　ズルイ！　ズルイ！　ズルイ！）
怒ったように眉をひそめてキッと振り向くまどか。しかし、侑紀がそれに味を占めたのは明らかだ。再び、おま○こと指の追いかけっこが始まった。そして、今度はお尻が突き出された瞬間に自分の鼻づらを突っ込み、くんかくんかと匂いを嗅いで小声で言う。
「あぁ、いい匂いだなぁ……くんくん」
（そんなぁあああああ!!!　いやぁぁぁあああああああ!!!　はぁあああああん!!）
まどかは心臓が飛び出そうになった。想像していた以上の恥ずかしい行為だった。
きゅんきゅんきゅい！　子宮が、子宮が疼く。いやらしすぎてブルブルする！
そこへ更に侑紀が卑猥に畳みかける。
「小さなまどかちゃんが俺を見てるぞ。勃起して尖ったまどかちゃんが俺を見てる！」

太腿を伝い流れる愛液の濁流に頬を濡らして、揺れる大きなお尻の真ん中に顔を挟み、唾液をたっぷりと絡めた舌を秘所に挿し入れると、尖り切ったまどかの肉豆をれろれろと高速で摩擦したのだ。

（あああああああああん!!!　いやぁあああああああああああああああ!!!　あっあんああっああんあアンぁあ～～～～～～～～～ッ！）

侑紀の顔面を危うく突き飛ばしそうな勢いで、まどかの尻が跳ね上がった。イッたのだ。くの字となって完全に洗濯機に倒れ込み声なき声で喘いでいる。しかし、侑紀は許さない。

「まだ配信中だよね、しっかりしないと……そらっ！」

立ち上がってまどかの上体を抱き起こし、密着させた怒張をイッたばかりのおま○こにそのまま捩じ入れ、突き立てる！

にゅぐうっ……じゅぷっ、ぐちゅぬちゅううっ！

「～～～～～～～～～～～～～～～～～ッッッッッッ♥♥♥♥」

挿入されただけで二度目の絶頂。そこからはもう止まらなかった。絶頂しながら突き上げられ、ブラを外され、乳首を弄られ、また絶頂する。それでもピストンは終わらない。

ずぱんっ、ずぱあんっ、ずぱあんっ！

繰り返し繰り返し、まどかは身体を跳ねさせた。跳ねる度にイッた。

もう、配信はほとんど放送になっていなかったが、それで怒るリスナーはいなかった。

むしろ、大喜びのコメントが飛び交っている。

まどかの膣内も狂喜乱舞していた。アクメに次ぐアクメの痙攣がぎゅうぎゅうとちんぽを締め付ける。そのせいで挿入感が更に増し、感度は倍増。はしたない悦び汁がとめどなく垂れてどろどろだ。熱くたぎり、うねる膣道。亀頭に抱き着く肉の襞。

「出るっ……イクよ、まどか！　うううっ、なっ、膣内に！」

おっぱいををめちゃくちゃに揉みしだきながら、背中にしがみつく侑紀が押し殺した声で耳元に囁く。

恋人の射精が近いことはまどかもわかっていた。自分を貫く肉棒がびゅくびゅくと大きく脈を打ち始めているから。アレが来る。奥に浴びせられたらまたイッてしまうだろう。

（イかせて！　ザーメン注がれると侑紀のこと以外何も考えられなくなるの！　そうなりたいの！　射精でイカされるの大好きなの！　あ、ああっ……あああああああああっ!!来るっ、侑紀のザーメン来る！　イッちゃう。侑紀のザーメンで私、イクッ……嬉しい！いくっ、いくいくいくっ……あああああああっ、いっ……いっちゃうぅぅぅうう！）

どぴゅうううっ！　どぴゅっ、どぴゅどぴゅどぴゅうううっ！

放たれた熱い濁液を逃すまいと子宮口がぎゅうんっと締まった。それでも膣内に逆流し溢れかえる精液に、おま○こがぶるぶると激しく震えて歓喜する。

絶頂。まどかの白い裸身が美しいS字を描いた。

配信を終え、ふたりはしばらく洗濯機に身を伏せて折り重なったまま過ごした。
冬の夜の冷気が、重ね合う火照った肌に心地良かった。
「凄く良かった……」まどかが呟く。
「俺も」侑紀も微笑み返す。
と、そのとき。
「侑紀くん、いるかね？」
浴室のドアの向こうから声がした。まどかの父だ。そして、ノック。
「背中でも流そう。男同士、裸の付き合いといこうじゃないか」
（ヤバイ！　入って来る！）
今、娘さんとの裸の突き合いをしていたところなんですとは言えない。ぶっ飛ばされる。
血の気が引き、身体の火照りも一瞬で吹き飛んだ。
そうだ、洗濯機！　とりあえずまどかを中に……
だが、一歩遅かった。
「……私で隠さなきゃ！」
先に動いたのはまどかだった。全力で侑紀を風呂場に突き飛ばす。
よろけた侑紀は頭から湯舟の中に。

どっぽおーん！
がちゃりとドアノブが回る。
「きゃあああああああああっ！」
両腕で胸を覆ってまどかが叫んだ。その大きな悲鳴が派手な水音をかき消す。
「入っているのは私です、お父様！」
「すっ、すまんっ！　侑紀くんかと……」
娘の裸から目を逸らすまどかの父。
ぶくぶくぶく……。侑紀はそのまま頭の先まで湯に沈めて息をひそめていた。
まどかの父が退散し、ドアが閉じられるまで生きた心地がしなかった。
（助かったあ……）
思わず安堵のため息を吐こうとし、しこたまお湯を呑む。
「げほっ！」
ざばっと頭を出すと、靴下も脱ぎ去り、長い髪をまとめてタオルで覆ったまどかが入って来るところだった。
「一緒に入ろ♥」
「えっ……」
「嫌なの？　お父さんとの方が良かった？」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/